

## G—2 家庭科教育内容に関する研究(III)

### —調理学習における切り方の予備的研究—

都立立川短大 大山サカエ  
広島大教育 石渡すみ江  
岩手大教育 ○清水 房

1. 前回の調査は、教育内容を規制する要因のひとつとして、社会的要求を取り上げて報告したが、今回は調理学習における切り方技能の発達を実験的に追跡し、レディネスの面から研究しようとするものである。

2. (1)実験期日は昭和45年4月30日から6月4日まで、5年生5回、6年生5回、延べ10回にわたって測定した。(2)被験者は、岩手大学付属小学校に在籍する児童各学年20名ずつ計40名とし、男、女の比率は各学年とも平均化するようにした。(3)予備実験は5年、6年各3名ずつに実施し、本実験ではこれら6名の学童は除いた。(4)取り上げた材料は生野菜の調理—サラダ作り—の中から、きゅうりの輪切りとキャベツのせん切りの2種類を取り上げて実施した。(5)一定量のきゅうりと、キ

キャベツを配分しておき一定時間内に切った結果について評価し、一週間おきに5回の変化を追跡した。

3. (1)きゅうりとキャベツとの切り方に関する技能間には相関がある。

(2)知能偏差値と切り方技能との間には相関は、みとめられない。

(3)切り方に対する児童の意識の難易と技能評価との間には6年では一致性がみとめられるが、5年においてはみとめられない。

(4)経験の程度と技能評価との間には、関係がみとめられない。

(5)5回の上達傾向においては、学年による差異がみとめられる。